鏡花水月

小林 晶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鏡花水月

【Ｎコード】
Ｎ２４９４Ｅ

【作者名】
小林　晶子

【あらすじ】
民事事件専門だった弁護士の岡崎が、はじめて担当することになった刑事事件の被疑者はやっかいな状態で…。

第一話

「おや、岡崎先生」
ちょうど病室から出てきた刑事と鉢合わせて、岡崎達也はゲッと身体を引いた。エリートっぽい神経質そうな男と大柄で愛想の無い男とは、何度か顔を合わせたことがあるが、どうも好きになれない。仕事上のライバルであるということ以前に、人間性としてどこか相容れぬものがあるのだろう。
「今から面会ですか」
さっさと中に入ろうとした達也の背に声をかける。
「ええ、まあ」
「まったく、彼には困ったもんです。いい加減にしてもらわないと」
渋い顔で言うと、銀縁の眼鏡をかけ直す。その、およそ横柄な口調と態度に、達也は自分の顔が引き攣るのを感じた。
「…その様子じゃ、今日も何も聞けなかったみたいですね。捜査、行き詰まってるんじゃありませんか」
「いや、仕事がやり辛いのはお互い様ですよ。最有力容疑者があんな調子ですから、仕方ありません」
「そうですね。あんな調子だから、本当に最有力かどうかもはっきりしませんしね」
顔を合わせる度にこれで、冷戦といってもいい状態である。傍から見れば、いい歳の大人が大人気ない口喧嘩をしているようにしか見えない。が、本人達は至って本気で真面目に、この厭味と皮肉の応酬を繰り返している。
「未成年は起訴しても、そう重い判決は出ないでしょうからね。頑張って下さいよ、弁護士先生」

去り際の刑事の捨て台詞に、達也は趣味の悪いスーツの背中をきつく睨みつけて見送った。
苛立って乱暴にドアを開けると、静かにしろと言わんばかりの咎める視線が達也を迎えた。小さくなって、今度はそっと閉める。
「どうですか、村瀬くんの様子は」
「良いとは言えませんね。相変わらずです。食事を摂らないので点滴ばかりですし、放っておけば眠ろうともしない。睡眠薬を使っていますが、今のままじゃ衰弱する一方です」
点滴の針を抜いていた医師が、手元から目を離さずに答える。その説明を聞きながら、達也は静かにベッドに近づいた。
横たわっている彼は、話している間も音ひとつたてない。眠っているのかと思ったが目は開いていて、虚ろに天井を見つめている。度々事情聴取があるので、夜以外は薬を服用させないようにしてくれているらしい。
「村瀬くん」
「無理ですよ。先刻も警察の方が何度も呼び掛けていましたけど、返事どころか口を開きさえしませんでしたから」
そう言われて口を噤むと、今度は顔を覗き込んでみた。もともと色白なのが、日毎に病的な青白さを増している。焦点の合っていない眼には、至近距離にいる達也でさえも映っていないようだ。これでは眠っているのと、さして変わらない。
「参ったなー」
「刑事さんも同じことを言ってらっしゃいましたよ。何も喋らないのが犯人の証拠じゃないのかって」
傍にいた若い看護婦が言うと、達也はぴくりと眉をしかめた。
「あンの性悪刑事が」
吐き捨てるように言って、鞄から取り出しかけていたファイルを、諦めて元に戻す。
中の書類には、仕事に必要な事件の詳細をまとめてあるのだが、それだけではどうにもならない。弁護士に一番必要な、依頼人自身

の証言が欠けてしまっているのだから。
「やっぱり、精神鑑定してもらうか」
「こんな小さい子に、ですかぁ」
子供好きそうな看護婦が、批難の声を上げる。精神鑑定は、場合によっては何ヶ月もかかって、その間は検査とテスト漬けの日々を送ることになる。決して印象の良いものではないだろう。
「もう高校生ですよ、彼は」
「でも村瀬くんが犯人だって決まったわけじゃないんでしょう。かわいそう」
「どっちにしろ現場に居合わせたんだから、遅かれ早かれ出廷させられることになりますよ」
裁判所に出向く前に専門医にかかることになるなら、と言い募った達也に、医師が首を振った。
「今の村瀬くんに、カウンセリングや精神鑑定に耐えられるだけの体力はありません。出廷もまず無理でしょう」
きっぱり言われて、達也はこめかみを指で押さえた。
「…そう言われてもですね…」
それでは弁護の仕様がない。
「あっ、犯人探しとか」
「それは警察の仕事ですよ。テレビドラマじゃないんだから、弁護士はそんなことまでやりませんて」
周りの人間が思っているほど格好良い仕事をしている人間なんて、そう大勢いるものではない。下手に私情が入れば弁護に支障を来たす。だからこそ必要以上に深入りしないことと身内や知り合いの弁護はしないように、というのが、暗黙の了解なのだ。

志摩子が何本目かのビール缶を開けた。
「そんなんだから、半人前って言われんのよ。四年も広沢先生の所にいて、何の勉強してたんだか。やっぱり経験積まなきゃ駄目ねェ」

「…エラソーに。俺よりたった四年早く生まれただけじゃねェか」
口答えした達也の頭を小気味良い音をたてて張り飛ばす。仕事が早めに終わるといつも、志摩子は達也の家に来て酒盛りを始める。恐ろしく酒好きで、大量の酒を買い込んでは、あまり飲まない達也相手にくだを巻いている。
「実際偉いわよ、私。大体、いい歳こいて仕事の好き嫌いしてるような豎子に言われたくないわ」
元々同じ弁護士事務所の先輩だった志摩子が独立したのは二年前で、達也が志摩子の事務所に移ってからは、まだ一年も経っていない。有名な弁護士である養父の監視と庇護が嫌だった達也を、志摩子が引き抜いたのだ。
「あれは、得意不得意の問題だろ」
缶のまま、うわばみのようにアルコールを流し込む志摩子を、白い目で見ながら小声で呟く。
「やってもみないで、なんで苦手だって分かるのよ」
「民事慣れしちまってる俺が半端な弁護するより、昌輝に任せた方が絶対いいって」
「文句言わない。昌輝は今、手いっぱいなのよ」
仕事を押しつけられた時から何度も同じことを言って渋っているのに、その度にこんな具合でかわされる。
「何ていったっけ？その高校生」
「村瀬　稔」
「あーうん、それ。どうよ？あんまり上手くいってないみたいだけど」
からかうみたいに言いながら次の缶に手を伸ばす志摩子の腕を掴んで止める。いくら志摩子が笊でも、一人で帰れなくなったら困る。志摩子は不満気に達也を睨んだ。
「どうもこうも、人形相手にしてるみたいだ。仕事にならねェ」
「まあ、目の前に死体が転がってて普通でいられる高校生なんて、いるわけないか。仕方ないでしょうね」

金田一少年とかなら別だけど、と付け加える。もしそうなら、どんなにか楽な仕事だっただろう。
村瀬稔の通う高校で教員の遺体が発見されたのは一週間前のことだ。被害者は北沢という生物教師で、死因は頭部を強打されたことによる脳挫傷だった。凶器の花瓶の指紋は拭き取られていたが、明らかに他殺と思われる現場で遺体の傍に居たのが稔だったのだ。それも、気を失っていたわけではなく、茫然自失の状態で。
「でも、ただ目撃しただけの反応にしては、過剰なのは確かよ」
志摩子の言う通り、あれではまるで稔の方が被害者だ。
「じゃあ、やっぱり村瀬が犯人なのか？…とても人殺せる奴とは思えなかったけど」
「分かんないわよ。最近の若い子は」
オバサンな発言を指摘しかけて、達也は慌てて話題を変えた。
「とにかく、やってるかやってないかだけでもはっきりさせとかないとな」
それでなくても弁護士になってから担当したのは全て民事訴訟だったのに、刑事事件での初仕事がこれだ。仏頂面になった達也の頬を志摩子がぎゅうっと思いっきり抓る。いつ持って来たのか、３５０ｍｌ缶を片手に二本も持っている。まだ飲むつもりだ。
「だぁから、アンタは未熟だって言ってんのよぅ。それくらい自分で判断しなさい。そんなんじゃ勝てる裁判も勝てなくなるわよぉ？」
いい加減酔いが回ってきたのか、ろれつが怪しくなってきた志摩子を達也はうるさいと怒鳴りつけて今開けたばかりの缶を取り上げた。
「…おい、もう止めとけよ。おまえ、目ェすわってるぞ。帰れなくなったって知らないからな」
「じゃー泊めて？」
「帰りやがれドアホ。…明日も仕事、あるんだろ」
追い立てるように肩を叩くと、志摩子は不機嫌そうに立ち上がる。
達也は短く嘆息すると、志摩子の背中を押して玄関まで連れて行っ

た。
「寝る前にちゃんと薬、飲みなさいよ」
「分かってるって。…俺は子供かい」

村瀬稔が通っていた高校は、最寄りの駅から歩いて五分とかからない私立の男子校だ。達也が稔の弁護士だと言うと、すんなり校内を案内してもらえることになった。事件直後にも来たが、やはり部外者を一人でうろつかせるわけにはいかないらしい。日曜で、部室のない校舎内に生徒が少ない。

一見、気難しそうな秋吉という教師は、事件について尋ねるとショックを隠しきれないといった様子で溜め息をついた。

「村瀬くんは私が受け持っているクラスの生徒なんです。明るくてクラスの人気者で、クラスのちょっとした雑用なんかも頼まれてくれたり。本当に良い生徒なんです。彼が北沢先生を殺すはずがありません」

廊下を先に立って歩いていた秋吉が途中で足を止める。そして廊下の突き当たりを指差した。

「あそこが図書室です。村瀬くんは図書委員だったので、よくここでいるのを見かけましたよ」

「へぇ。…委員の仕事って、どんなことするんですか」

学生時代の達也は図書室や教科書以外の本とは縁遠い生活をしていたせいか、思い当たるものがない。

「主に図書の整理と、貸し出し返却の管理です。でも、よく放課後まで残って図書室の掃除をしていましたから」

「…じゃあ、事件の日も、それで遅くなったとか？」

「さあ、私には分かりません。司書の先生なら分かったかもしれませんけど、その日はちょうど図書の買出しに行っていて」

休日だから図書室は開いていない。仕方なく、そのまま現場に案内してもらうことにした。

図書室とは反対方向に続いている渡り廊下を通って来た別校舎からは、グラウンドの様子が一望できる。私立だけあって、校舎の造りも敷地の広さも公立とは比べものにならない。

「この辺りです」

“１－３”という札のかかった教室の前で止まると、秋吉は開けっ放しにしてあった入り口辺りを指し示した。廊下から教室の中にかけて、チョークの白い粉が不自然に擦られている。警察が現場検証をした跡だろう。

「これは北沢って先生のですよね」

稔が倒れていた跡は、窓際の壁に凭れるように付けられていた。北沢からはかなり離れている。

警察が言うように本当に稔が犯人なのだとしたら、北沢を殺した後、何故逃げなかったのか。現場の状況を見る限りでは、逃げようと思えば逃げられたはずなのに、わざわざドアから離れている。警察は、殺してしまったショックから動けなくなったのだろうと言っているが、衝動的な犯行なら凶器に残った指紋にまで気が回るだろうか。病院にいる稔が演技でもしていない限り、後から拭き取ったとは考えられない。第一、北沢を殺す動機もない。

「北沢先生は、何か人に恨まれたり嫌われたりしていたんですか？」

「そのことなら警察も聞いて回っていたようですが、勿論そんな事実はありませんでした。…ただ、北沢先生は正義感が強すぎて、一部の生徒からは疎まれていたところもありましたけど…、殺されるほど嫌われていたとは考えられません」

きっぱりと断言する。学校内で厄介事が起こった時の、典型的な反応だ。積極的に協力しているフリをして、一番触れられたくない所から遠ざけようとする。よくあることで、それが事件に関係無い事なら暴くつもりはさらさら無かった。

学校に寄ってからで、そう早く来たわけでもないのに、事務所に

は事務員のひとみしかいなかった。入ってきた達也に気付くと、人懐こい笑顔を向ける。
「あ、おはようございます」
「おはよう。…ひとみちゃんだけ？」
「いえ、昌輝さんは裁判所です。所長なら来るなり所長室に篭っちゃいましたけど」
節操なく置かれた鉢植えに水をやりながら奥の部屋を示す。志摩子が、自分ではろくに世話もしないくせに次から次へと観葉植物ばかり買ってくるから、ひとみが代わりに育てているのだ。
「お疲れみたいだから、そっとしておいた方が良いんじゃないですか」
「あー、心配しなくていいよ。コーヒーだけ淹れてやってくれる？あれじゃ仕事にならないだろうから」
所長室に入った達也は、広いデスクで突っ伏している志摩子を見つけた。ブラインドが下りたままで、部屋はかなり暗い。来てすぐにお休みしてしまったらしい。
「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す、所長」
わざと耳元で大声を出すと、志摩子が青い顔を上げた。
「〜っ止めてちょうだい。疲れてるのよ、私」
「ふざけんな、酔っ払いが」
こめかみを押さえる志摩子の顔面に書類を突きつけて、ブラインドを上げる。大分高くなった陽光が差し込んだ。窓の外は高層ビルが立ち並んでいるだけで、空気もどこか澱んで見える。
頭痛に顔をしかめながら、志摩子が書面に目を通す。
「…嫌ね。これじゃ、村瀬くん以外に犯人はいませんって言っているようなものよ」
志摩子の言う通り、状況からしてもこのまま起訴されたら勝てないかもしれない。まあ、起訴されるとしてもいつになることやらという気もするが。
「うーん、そうなんだよな」

「じゃあ、諦めて情状酌量の方で頑張る？未成年だし本人もアレだから、少年院には行かないで済むでしょうね。責任能力があったかどうかも問題だけど」
　ひとみが持ってきたコーヒーで少しは目が覚めたのか、弁護士らしい口調になる。複雑な表情を浮かべた達也は、志摩子から目線を外した。
「…動機が、ない。それに…なんかピンと来ない」
　口篭る達也に、志摩子はやれやれと言わんばかりに溜め息をついた。
「よくあることよ。彼のこと、信じたいのは分かるけど下手に同情すると公判でミスするわ」
「違う、同情なんか」
　現場は“１－３”の教室だった。最初は稔の教室がそこなのだと思っていたけれど、実際は一階上の“１－６”で、鞄も自分の席に置きっ放しだった。どうして教室を間違えたりしたのだろう。
「いいわよ、好きにやりなさい。でも、無理はしないこと」
「分かってる」
「だったらいいけど。暴走して村瀬くんの公判、不利にしたくないでしょう」
「どう転んだって、今以上不利にはならねェよ」
　ドアに手をかけた達也の背に、志摩子が悪戯っぽく声をかけた。
「あなたがこんなに情の移り易い人だとは思わなかったわ」
　達也は振り向いて小さく「アホか」と呟くと、乱暴にドアを閉める。その頭に響く音に志摩子は大仰に肩を竦めた。大きな音に驚いたひとみが、出てきた達也を凝視している。
「…どうしたんですか」
「いや、どうもしないよ。あいつなら全然大丈夫だから。ただの二日酔い、胃薬でも渡してやってくれればいいから」
「分かりました」
　常備薬の置いてある戸棚を探っていたひとみは、達也が上着を持

つのを目に留めた。
「あら、めずらしい。もうお昼なのに、どこか行かれるんですか？」
太陽の光が苦手な達也は、陽が高いうちは外に出ないでデスクワークばかりしている。裁判以外で外に出る時は、決まって陽が傾きかけてからだった。
「病院」
「融けないように、気をつけて下さいね」
ひとみの言葉に、達也は吸血鬼じゃないんだから、とぼやいて後ろ手に手を振った。

第一話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

第二話

いつもと時間帯が違うからか、病室の外にいる制服警官は一人しかいなかった。弁護士である達也の姿を認めると、眠そうだった姿勢を正して敬礼する。
「おはようございますッ」
「そんなに早くない。今日は一人なのか」
「いいえ。さっき面会人が来たので、中に」
付き添っているらしい。稔は最有力容疑者なのだから、当然といえば当然のことだ。
「面会って、誰？」
稔には両親も兄弟もいない。見舞いも兼ねた面会に来るのは叔母夫婦ぐらいだが、どうやら違うようだ。
「秋吉って教師です。担任だとか」
「あぁ」
堅物そうな顔を思い浮かべた時、病室のドアが開いて秋吉と警官が出て来た。秋吉は達也と目が合うと軽く頭を下げた。前もそうだったが、秋吉が達也を見る目はどこか棘がある。
「…弁護士の…」
「岡崎です。村瀬くん、どうでしたか」
達也が尋ねると、秋吉は溜め息をつく。
「眠っていました。入院までしているのに、少しも良くなっていないみたいでしたが、まさか彼に無理な事情聴取なんてしていないでしょうね」
怒気の含まれた声に、達也は慌てて首を横に振った。
「してませんよ。あれじゃ、聞きたくても聞けませんって」

「…そうですか。岡崎先生、村瀬くんのこと、本当によろしくお願いしますよ。彼は人を殺したり出来る子じゃないんです」
そう力説すると、学校があるのでと言って踵を返す。秋吉を見送って、それから達也は警官の方に向き直った。
「眠っていたんだろう。何をしていたんだ」
「？…いえ、特に何をしたってわけでは。何度か呼んで返事がなかったので、しばらく顔色を見ていたようです」
「…そうか」
言って病室に入ると、立ち込めていた薬の臭いが鼻をつく。白く細い腕に固定された点滴の細い針が痛々しい。秋吉の言う通り、いつもより顔色が悪く、瞼は閉ざされている。
「村瀬くん」
様子がおかしいことに気付いて名前を呼ぶと、稔は小さく身動ぎした。
「…村瀬くん…！？」
自分の意志では決して動こうとしなかった稔が瞼を重く持ち上げると、微かに唇を動かす。息が短く、声が掠れている。
「何」
「…て…たす、け…て…、先生…」
手を貸して上体を起こすと、稔は震える指で達也のシャツを信じられないほど強く掴んだ。同じ言葉だけをうわ言のように呟いている。
「わ、分かったから」
枕元のナースコールを叩くように押して、応じた看護婦に異変を告げると、達也は再び稔を横に寝かせた。怯えたように、掴んだ腕を放そうとしない。ガラス細工のような腕からは想像も出来ない力で。
どうしていいか分からず、腕の中で浅い呼吸を繰り返す背中を軽く摩ってやる。何人かの看護婦を伴ってやって来た医師に稔を任せると、邪魔にならないように外に出た。一人は上に知らせに行った

のか、残ったもう一人の警官が何か訊きたそうに達也を見ていた。
精神安定剤で落ち着いた稔の病室から出てきた医師を捕まえて様子を訊くと、しばらくは面会出来ないらしい。
「今までになかったことなので断言はできませんが、夢のようなものを見たのかもしれません。ひどく怯えていましたから、記憶が混乱しているのかも」
稔が何かを畏怖していることは、達也にも分かった。
「事件のことを思い出しかけている、ということですか」
「それは分かりません。そうかもしれないし、それ以前の恐怖体験を思い出しただけかもしれない。ですから、これは警察の方にも言うつもりですが、しばらくは事情聴取なども控えていただきたいのです」
「…しばらく、ですか」
「ええ、少なくとも村瀬くんが薬なしで眠れるようになるまでは。どちらにしても、このままじゃどうにもならないでしょう」
簡単に痛い所を突いてくれる。仕方なく承諾すると、医師はさっさと通常業務に戻ってしまったが、病室にはまだ看護婦が残っているようだし、ドアの前には警官が突っ立っている。達也が残っていても意味は無さそうだ。そう思って帰りかけた時、後を追ってきた看護婦が達也を呼び止めた。
「これ、弁護士さんのじゃありませんか？」
渡されたのは古い写真だった。何人かの男女が並んで写っている。高校生ぐらいだろうか、見覚えのないものだ。
「さぁ…？落し物ですか」
「はい。床に落ちていたから、きっとそうだろうと思って。昨日は無かったから」
「？…でもコレ、昭和５５年って」
昭和５５年なら、まだ四歳だ。日付は見ていなかったのか、看護婦は写真を見直して慌てて謝った。
「あ、ごめんなさいっ。そっくりだったから、私てっきり」

「…？」
首を傾げた達也がよく見ると、写真のど真ん中に見たことのある少年が写っていた。
「…まさか。俺は、」
言いかけて、ハッと口を噤む。口許を掌で覆ったのを、看護婦がきょとんと見つめた。写真を持つ達也の手に力が込もる。
「いや、何でもありません。コレ、俺じゃないです」
視線に気付いて肩の力を抜いた達也は、ぎこちなく笑って首を振った。きっと、他人の空似だろう。
それにしても…。

帰り際に今日は達也より早く秋吉が面会に来ていたことを思い出して、渡しておくからと言って預かった写真をじっと見た。
「え、これ…」
一瞬、写真に目を奪われた達也は、廊下の角を飛び出してきた人物と正面から衝突してしまった。予測していなかった衝撃に、バランスを崩す。
「大丈夫ですか？」
慌てて手を差し出したのは、帰ったはずの秋吉だった。
「すみません、急いでいたもので」
「イヤ、俺がボーっとしてたから。…秋吉先生は、どうしてここに」
「病室に忘れ物をしたようなので」
相当急いで走ってきたらしく、汗をかいている。手を借りずに立ち上がって、達也は手元に落とした写真を拾い上げた。
「…もしかして、これのことですか」
秋吉は驚いた表情になって、達也の手の中のものを見つめた。
「コレに写ってるの、雰囲気は変わってるけど高校時代のあなたですね」
例のドッペルゲンガーの隣で笑顔を浮かべている少年は、眼鏡を

かけて気難しくすれば“秋吉”だ。年齢も一致する。
「確かに、私のものです。いや、お恥ずかしい。未だにこんなものを持って」
「村瀬くんに見せるつもりだったんですか」
秋吉の言葉を遮って尋ねる。先刻、達也が見つけたのは“秋吉”だけではなかった。
自分そっくりの少年に気を取られていて気付かなかったけれど、そこに写っているのは紛れもなく“村瀬稔”だ。
「村瀬くん、なわけないですよね。まだ生まれてもないはずだし、写っているのは女の人だ」
秋吉は溜め息と共に声を押し出した。
「…彼の母親です。由香里は、彼が十一歳のときに亡くなりました。私達は幼馴染みで、兄妹のように育ったんです」
「警察には言わなかったんですね」
「事件とは関係ないことですから」
口調を強めてきっぱりと言い放つ。あまり触れられたくない話題だったらしい。学校で会ったときと同じで、これ以上は話さないという意思表示だ。
「ところで、弁護士さんは今までずっと村瀬くんと面会を？」
急に話を変えられて、訊こうと思っていたことを訊くタイミングを逃してしまった。
「え、ええ。先生が帰られた後、容態が急変して。医者の話じゃ、記憶が戻りかけているのかもしれないって」
「！？」
秋吉の顔色が変わった。驚きに目を瞠って、達也を凝視している。
「っそれで彼は、村瀬くんは大丈夫なんですか！？」
今にも掴みかかりそうな剣幕に押されて、達也は慌てて首を何度も縦に振る。それで我に返った秋吉は、バツが悪そうに謝った。
「私は、由香里も紗也香も本当の妹のように思っていました。なのに、由香里が死んだことを私が知ったのは、二年前なんです。…だ

から、あの子のことは他人事だと思えない」
高校を卒業してすぐにアメリカの大学に進学して、連絡もあまりしていなかったらしい。紗也香というのは稔の叔母の名前だ。よく見ると“由香里”の隣に写っているのが彼女だった。
「…岡崎さん」
秋吉が目を細めて懐かしそうに、けれどどこか寂しげに写真を眺めて言った。
「私が由香里を知っていること、彼が元に戻っても黙っていて下さいませんか。この写真のことも」
「…え？で、でも」
「あの子には両親がいないんです。…出来ることなら忘れた方がいい。私が両親のことを知っていると分かれば、聞きたがるでしょうから」

稔の叔母夫婦は郊外の、かなり広い豪邸に住んでいた。日中に一度事務所に戻って電話をしておいたのに、家には誰もいなかった。
「あの、ここって高開さんのお宅ですよね」
近所の主婦らしき人に声をかけると、訝しげに達也を見て。
「そうだけど…あなた、警察の人？」
好奇心旺盛な主婦は、パッと目を輝かせる。井戸端会議のネタでも探しているのだろう。弁護士だと言えばどんなメに遭うか、だいたいの想像はつく。
「ち、違います。えっと、学校の」
「あぁ、稔くんの担任の先生？」
誤魔化しかたを考えていると、主婦は勝手な思い込みをしてくれてホッと息をついた。そして次の瞬間、達也は抱えていた鞄を落としそうになって、慌てて持ち直した。
「私、てっきり奥さんの浮気相手かと思っちゃったわ。ほら、あなた若いし、二枚目だしねぇ」

「ハァ…あっいや、とんでもない」
稔の見舞いに来ていた叔母の紗也香とは、達也も何度か会った。あんな状態の稔の代わりに弁護の依頼をしてきたのも彼女だ。稔や写真の“由香里”とは違って、どこか近寄り難い雰囲気を持っている美人である。
「なぁんだ、そうなの」
何故かがっかりして、主婦が肩を落とす。けれどすぐに顔を上げた。
「でもまぁ、稔くんが来てからは、良い感じみたいだから」
「…へぇ」
「高開さんってね、ご主人と十以上も歳が離れているでしょう。お互い、仕事仕事であまり顔を合わせないみたいだったし。でも二人共、稔くんにはべったりなのよ」
「そんなに？」
「そりゃあもう。あの可愛がりようは普通じゃないわよ」
病院に来ていた紗也香も、初めは取り乱して狂ったように稔の名前を呼んでいた。切れ長の瞳を真っ赤に腫らして、側に座り込んでいた。確かに、過保護すぎる。
「でも稔くんぐらい良い子なら、高開さんの気持ちも分からなくはないわ。あの子なら自慢の息子よ」
「岡崎先生」
凛としてよく通る声に、訊いてもいないことまで喋っていた主婦は口を噤んだ。硬い声音に萎縮して、軽く会釈すると逃げるように去っていく。それを平然と見送って、紗也香は達也に向き直った。
「わざわざお越しいただいたのに、留守にして申し訳ありませんでした。明後日のリサイタルの打ち合わせが長引いてしまって。…どうぞ」
玄関を開けると、二階まで吹き抜けの玄関ホールが広がっている。幅のある階段を上がっていくと、グランドピアノが置かれた広い応接室あって、そこに通された。

紗也香は有名なピアニストで、コンサートやリサイタルで長期間家を空けることも珍しくない。婿養子の旦那は、紗也香の実家の事業を引き継いだ忙しさに感けて、家には寄りつかないらしい。
「稔の事でお訊きになりたいことがあるそうですね。どうぞ、何でも訊いて下さい」
手に持っていた紙袋を片付けると、紗也香は達也の正面に座った。
「すみません。忙しい時にお邪魔して」
「構いませんわ。私も、稔の事が心配で練習に集中できませんから」
前に見たときよりもマシになっているけれど、それでも紗也香の目は少し赤い。甥っ子の容態が気になるのと本番が近い所為で、気を張り詰めているようだ。
「今日伺ったのは、稔くんの事というより、彼の母親の事です」
紗也香が僅かに瞠目した。
「…何故、姉の事を？姉は七年も前に亡くなっていますから、今度の事とは関係ないと思いますけど」
「事件に関係あるとは言っていません。ただ、こちらとしても稔くんの家庭環境を理解しておかないことには、弁護のしようがありませんから」
「それは…どういう意味でしょう」
先刻までとは打って変わって、紗也香は目に見えて動揺している。
「例えば、精神鑑定で彼に心理的異状が認められたときには、彼に責任能力があるかないかで判決は大きく変わります。ですから、その原因が両親の不在にあるなら、それを立証しなければいけません」
言いながら、達也は紗也香の顔色を窺った。
今の説明が、稔が犯人だという事を前提にしたものであると、紗也香にも分かったようだ。見る間に真っ青になって、悲鳴のようにヒステリックな金切り声を上げた。
「やめて下さい！あの子には人なんか殺せません。ましてや異状なんて、そんなはずありませんわ」
秋吉とは違う。「人を殺せるような子じゃない」ではなくて「殺

せない」と断言している。
「例えばの話ですよ。俺も、彼がやったとは思いたくありません。けど本人があんな状態ですし、万が一ということがないと言い切れますか」
「ありませんッ」
「それは親の欲目ですよ。誰だって自分の息子が殺人犯かもしれないだなんて、思いたくないでしょうからね」
紗也香がどう思おうが、状況が不利なのは変わらない。もしこのまま起訴されたら、検事の方は状況証拠で攻めてくるだろう。物証が無いことを盾にはできても、犯人でないという確証が得られない限り、突き崩されるのがオチだ。
紗也香は唇を噛んで目を伏せた。
「あなたがた姉妹は、秋吉先生と幼馴染みだったそうですね」
「え、ええ。…私は、姉とは四歳、和夫さんとは六歳も違いましたから、姉のおまけみたいなものでしたわ。稔には言わないで欲しいと、私が和夫さんに頼んだんです。母親のことは思い出さないほうが良いことですから」
自身も思い出したくないというように、俯く。何故、そうまでして隠したがるのか。
達也は湧き起こった不信感を顔には出さないようにして言った。
「子供が、親のことを思い出すのは仕方ないことなんじゃないでしょうか。それが、どんな親でも。…忘れろっていうほうが無理だと思います」
忘れることが解決じゃない。かつて達也が養父から言われた言葉だ。そしてその言葉通り、多分あの時知らなかったら今の達也は存在しなかっただろう。
紗也香はしばらく黙り込んでいたが、膝の上で重ねた手を強く握って、声を絞り出した。
「…殺されたんです、姉は」
「…知っています」

「それだけじゃありません、母親の死体を見つけたのはあの子なんです。だから、あの子には出来ないんです」
幼い子供にとって母親の死は衝撃だ。確かに、もしそうなら人を殺したりは出来ないだろう。その経験が反対方向に作用していない限り。
「ですから先生を見たときは、正直言って血の気が引きました。稔がああじゃなかったら、絶対に会わせたりしなかった」
紗也香の言葉に、達也は首を傾げた。何の関係があるのだろう。
「どういうことですか」
「？和夫さんからお聞きになったとばかり思っていましたけど」
「いえ、何も。…何ですか」
紗也香は言うのを躊躇っていたが、促されて口を開く。
「稔の父親が行方不明だということは…？」
達也は頷いた。秋吉はいないとしか言っていなかったけれど、稔の両親のことはここへ来る前に確かめてきたから間違いない。村瀬慎一は、稔が生まれてすぐに理由も分からず蒸発している。由香里は女手一つで稔を育てたのだ。
紗也香は黙って壁掛けの鏡を指差した。細かい装飾のついた鏡の表面に、振り返った達也の顔が映る。
「…彼が、稔の父親ですわ」
「…は？」
そう言われても映っているのは達也自身で。
「あ…まさか」
古ぼけた写真に“由香里”や“秋吉”と共に写っていた“達也”。あれが村瀬慎一だったのだ。
「ええ。あの子も、会ったことはなくても写真ぐらいは見たことがあるでしょう。姉は死亡届も出さないで、ずっと義兄が帰ってくるのを待っていましたから」
「…じゃあ、稔くんは」
達也が問いを重ねようとしたとき、ドアがノックされて家政婦が電

話の子機を手に入ってきた。
「お電話です、佐伯弁護士事務所というところから」
子機を受け取って怪訝そうに電話口に出た瞬間、めいっぱい怒気の込もったひとみの高い声が達也を責めた。
「携帯ぐらい持って歩いて下さいっ」
「えっ？」
持ってる、と言いかけて、達也はあっと声を上げた。午前中、病院に行ったとき、携帯の電源を切っておいてそのまま忘れていた。帰るなり稔の家のことを調べていたからここにいることが分かったのだろう。
「ご、ごめん」
迫力に圧されて思わず謝ると、今度はそんな場合じゃありません、と怒られた。
「今、病院から連絡があったんです。警察が…村瀬くんの事情聴取するって言ってるって」
「何だって！？」
「無理だって止めたらしいんですけど、専門の人が一緒だから平気だって」
達也は、融通の利かなさそうな担当刑事の顔を思い出した。稔が犯人だと妙に自信を持っていたから、証言を得るためならやりかねない。
「分かった」
通話を絶った達也は、簡単な説明だけすると自分も行くと言い出した紗也香に、家で待つように言って病院へ向かった。

第二話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

第三話

身体が重い。視界が茜色にぼやけているのは、今が夕方だからだろうか。だんだん意識がはっきりしてくると、ここがどこかの教室なのだということがわかった。でも、どうしてこんなところにいるんだろう。思い出せない。

必死に記憶の糸を手繰り寄せていると、不意に目の前が陰った。誰かが自分の上に覆い被さっているのだと気付いたときには、大きな手で口を塞がれていた。

激しい憎悪を顕わにした声が、耳元で囁く。

『裏切り者』

その声を知っている。近づいてくるその人を知っているのに、名前を呼ぶことも出来なかった。

『私から離れるなんて、許さない』

耳にかかる熱い吐息に身体を竦ませる。その強制的な呪縛から逃れようと必死にもがいたけれど、振り払うことが出来なかった。

「！？」

『裏切り者。…裏切り者』

何度も繰り返される言葉に、頭の中がおかしくなりそうだ。押さえつけられている手首の痛みに、気が遠くなる。

何のことをだか分からないよ。

裏切った？

知らない。裏切ってなんか、ない。

本当に？誰も？

…本当に、誰も…？　…分からない。

裏切り者。

裏切り者…そうかもしれない。自分の知らないところで、誰かを傷つけていたのかもしれない。…もう、どうだっていい。
薄れていく意識の中で、声と音を聞いたような気がしたけれど、それが何かを理解するより早く、目の前が朱色に染まった。

裏切り者！

『…約束だ、誰にも言わないと。もう、私を裏切るな』

「わあ…っ」
無意識のうちに、目の前にあった手を振り払っていた。重い腕を持ち上げて、掌で顔を隠すように覆う。
そこは茜色の教室なんかではなくて白一色の部屋だったけれど、やっぱり自分がどうしてここにいるのかは思い出せなかった。
「気がついたか？」
声の方へ焦点を合わせると、スーツの男が三人、立っていた。誰なのか尋ねようとしたけれど声が出ない。息苦しい。全身が汗で濡れていて、身体が言う事を聞かなかった。
浅く呼吸を繰り返して再び俯いてしまった稔に嘆息して、男の一人が口火を切った。
「村瀬稔くんだね。八日前にあったこと、憶えているか？」
いつかテレビで見た、刑事みたいな口調だ。
「君の学校の教師が殺された事件だ」
コロサレタ？キタザワ？…何も判らなかった。
後ろにいた男が前に出ると、稔の背に手を当てて上体を起こそうとする。けれど手が触れた瞬間、ひどい嫌悪感に襲われて身を捩った。
「…ひ！」
「ようやく正気になったと思ったら、これか」
「触れられるのを嫌がっているようですね。何か事件に関係あるの

かもしれません」
「構わんさ。口が利けないわけじゃないだろう」
銀縁眼鏡の男がそう言って、稔の顔を覗き込んだ。
「村瀬くん、君は北沢という男を知っているね」
稔が首を横に振る。
「そんな筈はない。君の学校で生物を教えていた先生だ。君のクラスも受け持っていたんじゃないのか」
何も答えない稔に苛立ったのか、男が肩を強く掴む。
「君が、やったのか？君が北沢を殺した、そうなんだろう？」
「…ひぃ…」
顔を背けて頭を抱え込んだ稔の脳裏に、見覚えのある青年の顔が浮かぶ。よく笑う、冗談が好きでいつも生徒に囲まれていた人。誰にでも優しい人。
コロシタ？ダレガ？ダレヲ？
思い出せない。頭が軋むように痛みを訴えている。
思い出したくない。
「長くこの状態でいるのは疲れるだろう。黙っていたってすぐにばれるんだから、事件の日の事を思い出すんだ」
強く肩を揺すられて、目の前が真っ白になった。――――思い出してはいけない。
「ッやだ…っ！！」
先刻までの気だるさが嘘のようにベッドから跳ね起きると、目を瞠る三人を突き飛ばして病室を飛び出していた。

病院の入り口を行ったり来たりしていた看護婦は、達也の姿を認めると慌てて駆け寄ってきた。もう大分陽が沈みかけていて、ロビーにも廊下にも人気は疎らだ。
「村瀬くんの記憶が戻りかけていると連絡がいったらしくて」
稔の病室の前には、いつもより大人数の制服警官が立っている。

「何を、しているんだ」
怒りを顕わにして達也が尋ねると、一人が前に進み出た。ドアに近づかせないようにしているらしい。
「カウンセリングを受けさせるなら、弁護士を通してもらわないと、勝手なことをされては困る」
「カウンセリングではありません。ただの事情聴取です」
「でも、専門の人が一緒だからって言って、私達まで入るなって」
噛みつくような剣幕で看護婦が警官達に抗議する。怒っていても小声なのは、壁一枚隔てて病人が寝ているからだろう。
「捜査一課の心理捜査官が一緒だ、ということです」
あのエリート刑事が、稔に自供させようとしているのは明白だ。きっと無理させるに決まっている。
警官達は、達也が弁護士だと言っても、オウムのように同じ事しか言わなかった。
「事情聴取中です。面会は出来ません」
頭の固さは上司に負けていない。達也は溜め息をついて言った。
「君達に制限する権利はないよ。取調べでの弁護士の立ち会いは、法律で保証されてる。刑事目指してるんなら、それくらい知っておいてくれよ」
皮肉を込めてそう言い置くと、達也は警官の脇をすり抜けて病室のドアノブに手をかけた時。
「ッやだ…っ！！」
悲鳴に驚いて扉を開け放した達也が部屋に踏み込むより早く、中から少年が飛び出してきた。
「うわっ」
「村瀬くん！」
反射的に避けて、引き止めようとした達也の腕を躱した稔は、振り返らずに病院の奥へ走っていく。まるで何かに追われているようだ。達也は警官達を退けて看護婦の背中を押し出した。
「稔くんの方、お願いします」

「は、はい」
駆けていく後ろ姿を見送った達也は、病室から出てきた刑事の前に足を出す。
「っ！？何を」
辛うじて転倒するのを免れた刑事が、ずれた眼鏡を指で押し上げて達也を睨む。いつもなら少しいけ好かない程度の仕草でさえも、腹立たしく思える。
「それはこっちの科白ですよ、刑事さん。病人に自白強要というのは感心できませんね。そうまでして彼を犯人にしたいんですか」
やり方が法律ギリギリで強引なのは、多分この事件の犯人を検挙すれば昇進できるとでも言われているからだろう。
「犯人は村瀬稔だ。事実、彼は我々の前から逃げ出した」
「何をした」
「ただの事情聴取だと言っているでしょう。まぁ、あの身体ではすぐに取り押さえられるでしょうね。…せいぜい我々の足を引っ張らないようにお願いしますよ、弁護士先生」
嘲るような口調で言う刑事の胸ぐらを掴み上げた。後ろの二人が止めようとするのを振り払う。怒りで頭がどうにかなりそうだった。
「…感謝してもらいたいぐらいだ。誤認逮捕せずに済むんだからな」
殴りつけたい衝動を抑えて力いっぱい突き放した時、廊下の奥に甲高い悲鳴が響いた。稔を追いかけていった看護婦の声だ。
達也は自分の不注意に舌打ちして、声の方へ走った。
「やめて村瀬くんっ。やめなさい！！」
争っている二人を見つけた達也は、その姿を目にして愕然と立ち止まった。三人もいる警官でさえ、その異様な光景に立ち尽くしている。
「先生、村瀬くんがっ」
振り向いた看護婦の顔は血塗れだった。顔だけではなく白い服にまで真っ赤な血が飛び散っているのに、そんなことには構いもしないで、暴れる稔を押さえている。

稔の方はもっと酷かった。白い首筋に走った裂傷から溢れる鮮血が、着ていたTシャツを紅く染めていく。それでも稔は狂ったように看護婦の手を払って、その度に赤いものが首筋を流れた。何も見ていなかった光のない瞳からは、涙が零れて頬を伝う。唇が言葉を紡ごうとしているのに、声は音にならなかった。

後から来た刑事達も呆然とその場に突っ立っている。達也がようやく我に返ったのは、錯乱した稔が看護婦を突きとばしてからだった。

「稔くんっ」

血に濡れた指を傷口に伸ばす稔の、自由になった左手を抑えつけて、立っていた警官を怒鳴りつける。

「医者を呼ぶんだ、早く！」

達也の声に、弾かれたように駆け出す。

稔は、触れられることに異常な程の恐怖を感じているらしい。けれど稔の細い指先には、抉られた皮膚が残っている。放せば新しい傷をつくってしまうだけだと分かっているから、放すわけにはいかなかった。

こんなふうに自虐的になることも恐怖という感情を表すことも、今まではなかったことだ。医師の言う通り記憶が戻りかけているのだとしたら、引き金になった何かがあるのだろう。

「…いやだ、放してよっ…」

稔が顔を背けて大きく頭を振る度に、傷口が開く。自由を奪う強い力に抵抗した右手の爪が、達也の頬を掠めた。痛みに眉をひそめるのと同時に、ハッとして稔の左手を引き寄せて。

「稔！！」

我を忘れて大声で叫ぶと、首筋の傷を自身の掌で覆う。指の間から血が流れて落ちた。

「……」

驚いて動きを止めた稔は、達也を見上げて目を瞠る。そして、声も無く達也の二の腕を捉えて抱きしめる。

「…父さん、…会いたかった」
違うとは言えずに、達也が黙って抱きしめてやると、ふっと力を失った稔が身体を預けたまま気を失った。

爛れるような痛みと吐き気に耐えられなくなった達也は、目を閉じて廊下にうずくまった。
稔が医師達に連れられて病室に戻っていってから、どれくらい経ったのだろう。面会時間も終わったのか、人通りは途絶えている。蛍光灯のない廊下は、非常口の緑の光にうすぼんやりと照らしだされていた。
感覚を失って麻痺した指先で携帯を探る。顔を上げるのも目を開けるのも口を開くことさえも苦痛だった。それでも何とか鳴りはじめた呼び出し音が苛つくほどに長く感じる。
「達也？」
途切れた機械音の後に、聞き慣れた声が応じる。
「…どうしたの。村瀬くん、何かあったの？」
息をつくだけで精一杯で、息は言葉にならない。志摩子の声だけがやけにはっきりと聞こえていた。
「…悪ィ…もー駄目かも」
しばらく沈黙して、それから志摩子の悲鳴とも怒鳴り声ともつかない超音波に達也は顔をしかめる。
「絶対そこから動かないでよ、二十分で行くから」
志摩子は達也の返事も聞かないで一方的に通話を断ってしまう。電源を切るのも億劫になって、音がしたままの携帯を無造作に放り投げた。
これくらいのことで倒れていてはいけないのだと分かっているのに、どうしても重ねてしまう。決して忘れることが出来ない忌まわしい記憶。けれどそれが生きる糧になっていることも事実で。
「達也！？」

気が遠くなりかけていたのを引き戻したのは志摩子の声だった。息を切らして少し離れたところで立ち止まっている。二十分と言っていたのに、まだ十五分も経っていない。道交法が存在しない絶叫マシン並みのあの運転を思い出して余計に胃が痛くなったような気がした。

「言っとくけど私、怒ってるわよ」

「…見りゃ分かるって」

分からないほど短い付き合いでもない。その理由も聞かなくたって分かる。志摩子の目が頬の傷と服に飛び散った血を見て蒼くなっていることに気付いて、ひらひらと手を振った。つい今し方起こったことを手短に説明すると、口調とは裏腹にホッとした表情になって、志摩子は達也の傍らに膝をついた。

「リハビリはまだ早かった？」

「…全然」

「じゃあ訊くけど。無理しないって約束、忘れたわけじゃないでしょうね」

途端に無言でバツの悪そうな顔になる達也に溜め息をついて、汗で額に張りついた前髪を指で押し退けてやる。触れた額は信じられないくらい熱を持っていた。志摩子が非難の声を上げようとするのを、達也が目で止めた。

「…平熱が高いだけだ」

「馬鹿言わないで。自己管理も満足に出来ないような豎子が。つべこべ言ってないで大人しく帰って寝てなさい。…村瀬くんの担当は私が代わるから」

壁に寄り掛かりながら立ち上がった達也は、志摩子の視線を避けるように明後日の方向に顔を背ける。従うつもりがないという意思表示だ。

「いいこと！？あなたは自分と村瀬くんを重ねてるだけよ。自分と同じ境遇の子供を放っておけないだけ。同情してるだけなの」

子供に諭すように言う。達也は不満気に眉根を寄せた。

「…どっちだって仕事に影響はないだろ」
「そんなこと言ってるんじゃないわ！…お願いだからこれ以上無理しないで。本当はもう限界のくせに」
叩きつけるような悲鳴に達也は目を閉じて、顔を掌で覆う。志摩子の言う通りだった。本当は立っているだけでも精一杯だ。それでも達也は頷かなかった。
「…心臓」
「え？」
「もっと良くなってるのかと思ってたわ。上手く隠してたものね」
深い溜め息の後、志摩子が観念したように言った。
「…隠してたわけじゃない、慣れただけだ」
憮然として言う。志摩子は拳で軽く達也の腕を小突いただけで、それ以上は何も言わなかった。

第三話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

第四話

…怖い。
身体の自由が利かない。誰かが近くにいることが、誰かに触れられることが、こんなにも恐怖だと感じたのは生まれて初めてだった。
「…」
小さな呟きが聞こえる。怒っているようで泣いているような、悲しい声で。
「…ど、う…」
どうして。そう声に出そうとして気付く。訊きたかったのはこの不可解な行動の理由だろうか、それとも悲しんでいる理由だろうか。
壁に押しつけられて背中に痛みが走る。力も体力もある方なのに、振り払うどころか押し退けることすら侭ならない。いつもは優しいその人からは想像もつかないくらい強い乱暴な力が、手足を拘束していて動けなかった。
「…の、…裏切り者…」
断罪の言葉に、思わず顔を背ける。
助けを求めるように視線を彷徨わせた、その先にいたのは、写真でしか見たことのなかった“父さん”。どこにいるのかも分からないけど、ただどんな人か知りたかっただけ。毎日のように母さんが写真を見せて話してくれたから、いつも傍にいるみたいだった。
会えなくても、大好きだった。母さんが父さんを大好きだったように、俺も父さんのことが大好きだった。
『…おまえはあいつらとは違う。…私を裏切ったりしないだろう…？』

その人はいつも、どこか遠くを見るような目で俺を見ていた。
掌が妙に温かい。窓から夕日の光が差し込んでいて、目を開けると視界は真っ白だった。薬品の臭いが部屋中に充満している。眩しさに慣れて天井を見上げると、まるで保健室にいるような気がしてくる。身体に力が入らないで目だけで横を見ると、看護婦のような人がベットの脇に突っ伏していた。片手は稔の手を握っている。夏の暑さのせいか、掌は汗ばんでいたけれど、嫌だとは思わなかった。
「っ稔くん」
少し動いただけで、看護婦はがばっと起き上がる。
「大丈夫！？」
訊かれて上体を起こそうとすると、首に焼けるような激痛が走った。半端でない痛みに涙目で首筋を押さえる。そこではじめて首から肩にかけて包帯が巻かれていることに気付いた。
「まだ動けないわよ。傷は浅かったけど輸血までしたんだから、しばらくは安静にしてもらいます」
「…傷？」
「憶えてないの？」
オウム返しに訊かれて、傷を気にしながら頷く。憶えているも何も、自分の今の状況すら理解できない。
「あなたの担当が当たってる坂本です。よろしく」
それから熱を測ったり包帯を取り替えたりしている間に看護婦が今までのことを話してくれた。あの日起こったこと、疑われていること、そして今日までのこと。
全く身に覚えがないはずなのに、傷が疼いて頭が割れるように痛かった。
「本当に何も憶えてない？」
「…初耳、です」
知らない間にいろんなことが起こりすぎて、頭の中が混乱してい

る。思い出せと言われても、聞かされたことを処理するだけで精一杯だ。
「すいませんでした。迷惑かけたみたいで」
「そんなこと、病人で怪我人のあなたが気にしなくていいの。私達はこれが仕事なんだから」
後でちゃんと検査するから、と言う看護婦に稔がお礼を言うと、照れたように笑って、それから真面目な顔で小さく言った。
「こんなこと言ったら刑事さん達に怒られそうだけど、あんまり無理して思い出さなくてもいいのよ」
弱々しい微笑だけを返すと、稔は俯いて何かを考え込んだ。
「どうしたの？傷、痛むの？」
看護婦が心配そうに尋ねる。
「…いや、何でもないです」
気のせいかもしれない。きっと信じてもらえない。自分自身も夢だったのだと思いはじめているのだから。
…どうかしてる。そんなわけないのに。十五年も音沙汰無しだった父親に会ったような気がするなんて。
「何？言ってみて」
看護婦が真顔で稔の顔を覗き込んだ。

廊下で呼び止められた達也は振り返って、そこに稔の担当医の姿を認めた。
「村瀬くんなら、まだ面会謝絶ですよ」
言ってから、達也が持っていた薬を目に留める。
「失礼。昨日の今日なので、てっきり。…風邪でもひかれたんですか」
「え、ええまぁ」
愛想笑いで曖昧に言葉を濁す。実際は違うのだが、わざわざ説明するようなことでもなかったのでさっさと話を切り替えてしまった。

「それより傷の具合、どうですか」
「傷は大したことありません、出血の割に浅かったので。ですが身体が弱っていたこともあって、まだ意識が戻らないままです」
患者が往来する廊下から少し離れて、二人はとりあえず稔の病室に行くことにした。昨日のことで病院関係者や他の患者からの苦情が相次いで、しばらくは警官も立たせないようになったらしい。
「可哀相に。村瀬くんと同じような経験をした子供に表れる精神的な異常の中には、経験そのものではなく、事件後の事情聴取や社会の反応が原因になっているケースもあるそうです」
医師はそう言うと、黙って聞いていた達也の方を振り返った。
「看護婦の坂本さん、知っていますか」
急に尋ねられて達也は首を傾げたが、すぐにそれが稔の担当の看護婦だということを思い出した。昨日、錯乱した稔を必死になって止めようとしていた、あの若い看護婦のことだ。
「彼女が、何か？」
「あの人は昔、私の患者でした。一家心中で両親を失い、ただ一人生き延びた。その時、親戚中が彼女を押しつけ合った結果、彼女は人格障害を引き起こしたんです。大人しくしていると思ったら急に暴れだして自分自身を傷つけて」
独り残されて拒絶されたことが、子供の心を崩壊させる。必要とされていないと思い込まされることで生まれた闇が、いらない自分を消そうとする。典型的な自己崩壊のパターンだ。
「そういう子はどこかで誰かに必要とされたいと思っているんです」
「…だから看護婦に？」
誰かに必要とされたい願望からなのか、闇から救ってくれた医師に憧れたからか。
「さぁ。でもいつも一生懸命でしょう、彼女。私はあの人を見ると、医者をやっていて良かったと思えるんですよ」
そう言った医師の笑顔に、達也はつられて笑ってしまった。それでもすぐに笑いを消して医師を見つめた。

「何故、そんな話を…？」
何の意図もないにしては、唐突すぎる。医師は笑顔のままで「自慢話ですよ」と言ったが、達也が厳しい表情でじっと見据えると、小さく肩を竦めて言った。
「先生は村瀬くんや昔の坂本さんとどこか似ているような気がしたからです」
達也は目を瞠った。
「過去にあったことが今も先生の中で大部分を占めているんでしょう。意識しないで放ってあるのか、故意に見て見ぬふりをしているのかは分かりませんが」
どこも痛くはないはずなのに、身体や脳が軋んで悲鳴を上げる。これ以上訊くことを拒絶するように、目の前が真っ暗になった。
「先生？」
医師の声で我に返った時、稔の病室はもう目の前だった。
「熱が上がってきたんじゃありませんか」
言われて達也が顔を上げると、医師は再び捉えどころのない笑顔で達也の持っている薬を目で示した。
「風邪なんでしょう。無理はしない方がいいですよ」
達也が何か言うより先に医師が病室のドアの前に立つと、中から聞き覚えのある看護婦の声とまだ声変わりしていないような少年の声が聞こえてくる。ハッとして医師がドアを開けると、驚いた看護婦がきょとんとこちらを見つめ返していた。
「先生」
嬉しそうに駆け寄ってきて稔の意識が戻ったことを告げる彼女は、どこをどう見ても人格障害を起こしていたようには見えない。
看護婦は医師の後ろにいた達也に気付くと慌てて会釈をした。
「昨日はすみませんでした」
その間に稔の側に立った医師は傷を診たり脈や熱を測ったりして、異常がないか簡単な検査をしている。横になっているので稔からこちらの方は見えていないらしい。

「傷は痛む？」
「…少し」
稔が小さい声で答えると、看護婦が口を挟む。
「さっきはちょっと動いただけで、泣くほど痛がってたじゃない」
言われて、もっと小さい声で「…かなり」と訂正した。
「彼、事件のことも今までのことも、何も憶えてないそうです」
そう言って、昨日のことがあって病室には入らないようにしていた達也を、看護婦が稔の傍まで引っ張っていく。
「稔くん、この人はね」
なるべく顔を合わせないように顔を背けていた達也の横顔を見つめて、稔が呟いた。
「…父さん…？」
沈黙が病室を支配して、医師までもが呆然としている。看護婦がおそるおそる達也の表情を窺い見て、尋ねた。
「…お父さんだったんですか？」
「もっと笑える冗談にして下さい」
どこをどう見たら十五の子持ちに見えるのだろう。
達也は稔の方に向き直ると、名刺と左胸の小さな金色のバッジを示した。警察でいうところの警察手帳のようなものだ。
「弁護士の岡崎です。憶えてないかもしれないけど、君の叔母さんに頼まれて君の弁護を担当して…」
稔は達也の話をまるで聞いていないようで、ただじっと達也を凝視している。
「稔くん、岡崎先生と話出来そう？」
見かねた看護婦が尋ねると、稔は傷に響かない程度に頷いた。

二人になった病室で、先に口を開いたのは稔の方だった。
「…北沢先生、本当に殺されたの？」
達也が肯定すると、稔はそう、と呟いて目を伏せてシーツに顔を

埋めた。泣いているような間があって、稔が顔を上げる。泣いてはいなかったけれど、今にも泣き出しそうだった。顔色は悪く、首の包帯が痛々しい。
「昨日、先生が助けてくれたんですね」
稔が昨日のことを憶えているのに驚いた達也は大声を出しかけて、稔が怪我人だということを思い出して慌てて口を噤んだ。
「はっきり憶えてるわけじゃないけど、父さんに会ったような気がして。あれ、先生だったんだ」
稔は達也の頬の小さな傷に目を留めると、手を伸ばしてそっと触れた。
「…ごめんなさい」
記憶が抜けているのは確からしい。昨日のことを断片的に憶えていたのは、父親の記憶が強く印象に残っていたからだろう。
「…俺に、訊きたいことがあるんでしょ」
躊躇った達也に、稔は笑顔を向ける。
「平気だから」
どこが平気なんだ、と言いたくなるような見るからに力のない笑顔が、今の稔の精一杯なのだろう。達也は出来るだけ傷つけない言葉を選んで、いくつか質問した。どれもあまり事件の核心に触れるものではなく型通りの簡易なものだったが、本当に稔は何も憶えていなかった。
「部活、やってないんだって？」
「遅くなると叔母さんが心配するから。…特にやりたいことがあるわけじゃないし。それに、部活に時間を割くよりも、図書館で居る方が落ち着くんです」
それは本心のようで、無理をしているふうには見えない。家庭環境や交友関係でああなったのではないとしたら、稔は事件について何か知っていると、誰もが思うだろう。たとえそれが当事者であっても、目撃者という第三の立場であったにしても。
「…俺が、やったのかな」

弱々しく稔が呟いた。窓の外は陽が沈みかけていて、暗くなった室内では相手の表情を窺うことは出来ない。
せめて自分じゃないと言い切れるなら、少しは楽だったかもしれない。けれど今の稔は、本当にやっていなくても自分自身でそれを証言することが出来ないでいる。自身の無実を疑ってすらいるのだから。
「だったら嫌だな。俺、北沢先生のこと結構好きだったんだけど」
本当ならあの日、学校で何をしていたのか訊くべきなのだろうが、どうしてもそれ以上のことを尋ねる気にはなれなかった。
「…先生も、俺が犯人だって思ってる？」
ぎょっとして稔を見返すと、稔はベッドに横たわったまま、苦しそうに眉をひそめている。傷が痛むのか、指先が喉の辺りを覆っていた。
「もう喋らないほうがいい。傷口が開くといけないから」
「大丈夫…だから答えて」
縋るような瞳で、達也の腕を捉える。達也は迷った末に、出来るだけやんわりと細い手首をベッドの上に戻した。
「思ってない」
「…俺にも分からないのに？」
「信じるよ」
乱れたシーツを直して肩まで引き上げてやる。蒼白な稔の顔を覗き込んで、幼い子供に言い聞かせるように同じ言葉を繰り返した。
「君は疲れていて、それで不安になってるだけだ」
汗ばんだ額に掌を当てて瞼を閉じるように促す。稔は大人しくそれに従った。
「…父さんも、先生みたいな人だったらいいのに」
手の下で、微かに笑ったのが分かる。
「秋吉先生に会った？」
思い出したように稔が目を開けた。達也は、あのどこか厳格で神経質な印象のある顔を思い浮かべる。

「ああ」
「秋吉先生も、お父さんみたいだった。すごく優しくて一緒にいると安心する」
達也に対する態度からはあまり想像できないけれど、そういうものなのだろうか。秋吉夫妻の間には子供がいないから、妹のように村瀬由香里を可愛がっていた延長なのだとしたら、分からなくもないが。
「お父さんってこんな感じなのかな」
それには答えないで、達也は再び掌で稔の顔を覆った。それから、稔が今まで睡眠薬を服用していたことを思い出した。
「一人で眠れるか？」
「…うん」
もう一度、稔が目を閉じると、額から静かに手を離した。

第四話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

第五話

医師の話によれば、身体の機能や意識は正常に戻っているし、脳波にも異状はみられないらしい。単純に考えれば、昨日のことが何らかの影響を与えたことになるが、だとすれば例の自虐行為にもそれを引き起こすきっかけがあったはずだ。

事務所のドアを開けると、デスクで書類の整理をしていた昌輝が振り返った。

「おかえり。おまえ、また何かやらかしたのか」

「？…何が」

訳が分からすに訊き返すと、ひとみが肩を竦めて所長室を示した。

「止めてくださいよ。所長、嫌なことあったらすぐ拗ねちゃうんですから。困るんですよ、篭もるともう手がつけられなくて」

今朝、達也が事務所で事務処理をしていたときは顔を合わさなかったからすっかり忘れていた。

「まーだ怒ってんのか」

「何やったんだよ」

興味深そうに身を乗り出してきた昌輝を無視して、達也は自分のデスクに鞄を投げ出した。

「どうした、知恵熱でも出したのか？」

机の上に無造作に放られた薬の袋を目にして、昌輝が茶化す。何の処方薬か、知っているくせに。昌輝の場合は確信犯だから質が悪い。

「何やったのかは知らんが。悪いこと言わないから、さっさと謝ってきたほうがいいぞ。あいつ、根に持つタイプだから」

志摩子とは大学で同期だった昌輝は、達也とは反対に刑事事件を

主に扱っている。民事が得意の達也に殺人事件の仕事が回ってきたのは、昌輝が依頼を三つも抱えているせいでもあるのだ。
達也は昌輝の書きかけていた書類の目をやった。
「…内容証明？」
「中学生狙いの変態ストーカー。未成年だからあんまり騒がれたくないんだってさ」
「へぇ。俺だったら絶対、慰謝料とれるだけとる」
おまえは男だからな、と言って昌輝がにやりと笑う。
「今度やったらムショ行きだって脅したら、日和ってやがった。ったく、いい歳して『ママ』はねェだろ」
達也が空笑いだけを返すと、呆れたひとみが「弁護士がそんなことしていいんですか」とぼやいた。昌輝の法律に引っ掛かりそうな暴走は今に始まったことではないから、いまさら何を言ったって誰も止めない。いつ恐喝罪で捕まったとしても誰も驚きはしないだろう。
「おまえの方はどうなんだ、大変そうだけど」
昌輝が達也の方に向き直って尋ねる。達也は思い出したように溜め息をついてこめかみを押さえた。
「…大変なのはこれからなんだよ」
はっきり言って、今までの期間は殆ど何の意味もなかった。弁護士は警察ではないから、依頼人の証言を基に仕事をするのが基本だ。今回は国選でもないし、稔自身の意志がなければどうすることも出来ない。それでなくても稔の状況は不利だったが、彼が犯人だとはどうしても思えずにいた。それは志摩子の言う同情なのかもしれないけれど、それ以上に納得のいかない点が多すぎる。
「達也さん」
考え込んでいた達也は、事務所の電話が鳴ったことに気付かなかった。顔を上げるとひとみが受話器を手にして達也を呼んでいる。
「病院からです」
嫌な予感がして素早く受話器を受け取ると、坂本というあの看護

婦からだった。
「岡崎先生！？」
「稔くんが、どうかしたんですか」
勢い込んで話す看護婦を落ち着かせるように言って、先を促す。
「さっきまた稔くんが」
その言葉で連想したのは当然、昨日の夕方と同じ光景だった。けれど、怪我をしたのかと尋ねると、看護婦はいいえと答えた。
「暴れたとかそういうんじゃないんです。ただ…魘されていたみたいで『怖い』とか『助けて』とか、そればっかり何度も」
“また”魘されていた。あの時も、昨日の昼にも同じことがあった。確証はないけれど、それは多分事件に関わることだ。
仮に稔が犯人だとして、一体何が『怖い』というのだろう。何から『助けて』欲しいのだろう。犯人ではなく、つまり目撃者なのだとしたら、辻褄は合う。殺人現場を見て『怖い』と感じ、稔が目撃者であることを犯人が知っているのなら、そして口を封じようとしているのなら、『助けて』の意味も分かる。けれどそれなら何故、あの時そうしてしまわなかったのか。あの場所であの状況下で、出来なかったわけではないだろう。現に凶器についた指紋の処理はしているのだ。
「今は落ち着いてるから、今日はもう大丈夫だと思いますけど、一応。家族の方にも連絡だけはしておきました。心配するでしょうから」
「ああ、ありがとう」
よく気の回る看護婦に感謝して、達也は受話器を置いた。
あまり気が進まなかったけれど、一応仕方なく所長室のドアを叩いてみる。返事はなかった。そんなに怒っているのかと恐るおそるドアを開けると、志摩子は眠っていて電気も点いていない。昼間からずっと寝ていたようだった。
「おい、そんなところで寝たら」
近づいて手を伸ばした達也は、机の上に開けっ放しのアルバムを

見つけて思わず手を引っ込めた。見てもいないのに、何故かそれがあの人の写真だという確信があった。全身から血の気が引くのを感じる。

「…っ」

見てはいけない。脳から身体中に警告が鳴り響くように、頭の芯が痺れて目眩がする。達也は顔を背けてその場を離れると、ドアに背中を預けて座り込んだ。

『裏切り者』

可哀想な人。ずっと独りで苦しんでいる、可哀想な人。

『憎い』

だけど優しい人。本当は誰よりも、哀しいくらい優しい人。

どこで間違ってしまったの？

…本当は。

『もう裏切らないで』

あなたは誰を見ているの？

…本当は。

『もう裏切らせないで』

本当は、誰に何を伝えたかったの？

大好きなのに信じたいのに大切なのに。

お願いだから『壊さないで』。

自分の声で目が覚めた稔は、弾かれたように飛び起きた。息苦しさに、きつくシーツを掴んで荒い呼吸を繰り返す。

「っ痛…」

少し落ち着くと、首の傷が痛みを訴えているのに気がついた。無意識のうちに弄ったのか、きれいに巻かれていた包帯が解けかけている。頬に違和感を感じて指で触れ、自分が泣いていることに気付

いた。夢だけではなく、涙が頬に残る跡を何度も何度もなぞっていく。

…傷が痛むせいだ、きっと。

「今日で三日目だ」

病室に入ってくるなりそう言われて、訳が分からず稔は首を傾げる。

「何が？」

「君が魘されるようになってから」

達也が閉めきっていた窓を開けると、生温い空気を押し出すように朝の風が吹きこんできた。遠くに東京湾が見える。周囲は穏やかな住宅街で、緑も多く見晴らしがいい。

「何が原因なんだろうな」

目が覚めると何の夢だったのか分からなくなっているという。ただ、息苦しさと異様なまでの恐怖感が残っているだけで。

稔はしゅんとして俯いてしまった。

「…ごめんなさい」

「いや、君が謝ることじゃないよ。そんなつもりじゃないから、ごめん。それに、ほら、記憶が戻りかけてるのかもしれないし」

責めているつもりはなかったので慌ててそう言うと、稔は小さく頷いた。首の包帯はまだ取れていない。顔色も前より悪くなって、疲労が見える。

その時、病室のドアが開いて男が顔を出した。

「…岡崎先生、ですか」

あのいけ好かない奴ではない。さすがにもう顔は出せないと思ったのだろう。男は黒い手帳を開いて警察であることを示すと、達也に向かって軽く一礼した。

「今度、事件を担当する三崎です。先日は部下が出過ぎたことをしたそうで、申し訳ありませんでした」

部下といっても歳は同じくらいか、それより若く見える。正真正銘の官僚なのだろう。人の良さそうな、けれど感情の読めない笑顔を浮かべる彼の言葉を、達也はぴしゃりと撥ねつけた。
「謝るなら彼に。俺は警察みたいに犯人捜すだけが仕事じゃない、弁護士は依頼人を守ることが仕事ですから」
「せ、先生」
必要以上に攻撃的な物言いに、稔の方が慌てて宥めに入る。
「俺なら平気だから。…それに、憶えてないから謝られても困るし」
上半身を起こし疲れた顔で息を吐くと、稔は二人に背を向けて掠れた声で呟いた。
「訊きたいことがあるなら訊いて下さい。どうせ何も憶えてないから」
「思い出せること全て話してもらいたい」
「何を思い出せばいいのか分からないから」
三崎の誘導的な言葉をさらりと交わす。達也が事件のことを尋ねたときも同じ反応で、積極的に思い出そうとしているようには見えない。故意というよりは、無意識のうちに思い出すことを拒絶しているようだ。
あの日、学校で何をしていたのかと尋ねると、やはり稔は首を振っただけで黙り込んでしまう。
「北沢に会ったんじゃないのか」
そこで何かがあったと考えるのが妥当な線だろう。答えがないのには構わず、三崎は先を続ける。
「北沢か、別の誰かを見たんじゃないのか？」
「知らないっ」
稔の声が、達也が三崎を制止しかけたのを遮った。
「誰にも会わなかったし誰も見ませんでした」
喘ぐようにそう言うと、稔は呼吸を整えてシーツを引き寄せる。
「…ごめんなさい…何か、疲れてるみたいだ」
それ以上は何も言えなくなって二人が病室を出ると、入れ違いに

医師と看護婦が入っていった。警官をおかないでいいのかと尋ねると、三崎はあんなことの後ではあまり良い顔をされないので様子を見るだけだと言って苦笑した。
「また、『何も憶えてない』か」
「…また？」
達也が訊き返すと、三崎はええ、と言って何枚かの写真を取り出した。一枚は見覚えのある村瀬由香里で、残りは彼女の亡骸を収めた現場の写真だ。頭を割られているらしく、頭部からの出血がひどい。凶器は近くにあった灰皿だと教えてくれた。
「七年前、彼のお母さんが殺されたときも、彼はそのすぐ傍にいた。母親の返り血を浴びるほど近くに」
そんなことを紗也香は言っていただろうか。「見つけた」とは言っていたが。
「あのときも村瀬稔は今回と同じように何も憶えていなかった」
「どういう意味ですか」
「言った通りです。もしも村瀬くんが犯人ではないとしても、そこだけ憶えてないというのは都合が良すぎると思いませんか」
確かにそうだ。けれどそれだけでもたくさんの可能性がある。はじめから何も見ていなかったのかもしれないし、見ていたけれど本当に憶えていないのかもしれない。見ていて犯人を庇っているのかもしれない。そして本当は犯人である可能性。
「勘違いしないで下さい。別に村瀬くんが犯人だと言っているわけではありません」
どこがだと毒づく代わりに、達也は当然ですと言った。
「むしろ彼は被害者です」
「でも犯人を見ている。あなただってそう思っているんでしょう」
三崎に図星を指されて、ぐっと言葉に詰まる。そのことは何度か稔に尋ねたけれど、期待していたような答えは得られなかった。
「彼が庇うとしたら、誰だと思いますか」
訊かれて考えてみても、特に思い浮かぶ人間はいない。仲の良い

人間なら結構な数だが、無意識だとしてあんなになるまで庇うような相手となると限られてくる。
「…身内っていっても叔母夫婦くらいだし、北沢を殺す動機も機会もない」
「お互い、同じようなところで引っ掛かっているみたいですね」
三崎が肩を竦めて、二人は病院の外に出た。

このままじゃ駄目だ。
どうしたらいいんだろう。
「助けて…」
きっと本当は知ってるんだ。誰が、北沢先生を殺したのか、知っている。どうしてあんなことになったのか。思い出さなきゃいけないのに。
「…嫌…」
思い出してはいけない。壊れてしまう。
「助けて…先生…」
『壊さないで』。

シーツに埋めていた顔を上げると、稔は手を伸ばして上着を掴んだ。

しばらく写真を眺めていた三崎はもしかしたら、と呟いて達也にそれを預ける。
「同じ犯人なのかもしれませんね。手口も現場の状況も似ていますし」
「…灰皿、ですか」

「被害者は煙草を吸わなかったそうなので、おそらく来客用でしょう」
犯人は手元にあったそれを咄嗟に凶器にした。女と子供しかいない家に入れるということは顔見知りで、しかも信頼されていた人物に限られる。
「…どうして彼は殺されなかったんだろう」
「それじゃあまるで殺されたほうが良かったみたいに聞こえますよ」
呆れたように三崎が言った。そういうつもりではないが、犯人にしてみればその方がずっと安心できる。子供でも見られてまずいことには変わらないし、彼が記憶を失くしていなければ警察で証言されていたはずだ。
「殺さなかったんじゃなくて、殺せなかったんじゃないですか」
子供だから、と続ける。そんなものだろうか。衝動的に人を殺すと精神が昂揚して、必要以上に残虐になったり犯行を繰り返したり、とにかく理性を保っていられなくなる場合が多い。
「一人殺しても二人殺しても一緒だって思うけど」
何気なく呟いた達也に、三崎は再び呆れる。
「それを仮にも警察官である私の前で言うんですか」
「いや、あくまでも犯罪者の心理の一般論ですけど。それに七年前はともかく、今は高校生ですよ。子供といっても法廷での証言能力だって十分あります」
達也は気がついて、持っていた写真を三崎に返した。二つの事件が繋がっているとしても、二つを繋ぐ動機はない。
「一般論ってことは、例外もありますね。例えば、見られていたことに気付いて逆に我に返った、とか」
ありえないことではない。少なくとも理性的な思考が働いていたことは確かだ。
「彼が絶対に証言できないという確信でもあったのなら別ですが」
「まさか。記憶を失くしていることまで、七年前も今回も警察は公式発表していないでしょう」

「もちろんです。ですが身内や関係者は知っていることなので、知っている可能性は高いですが」
言ってから、何か都合の悪いことでも？と三崎が尋ねる。
「いや、犯人がそのことを知っているのなら、かえって都合が良い。口封じに来る心配がありませんから」
そう達也が言ったとき、病院の中から看護婦が転がるように駆け出してきた。息を整える間も取らず、凄い剣幕で達也の腕を掴んだ。
「稔くんが」
その言葉に、達也と三崎は顔を見合わせる。三崎は穏やかに看護婦の背中を叩いた。
「落ち着いて。…彼が、何ですか」
「いないんです。捜したんですけど、病院のどこにも」
驚いて、そして稔自身が動く可能性を考えなかった自分達の迂闊さに腹が立った。
自分から行ったのだ、犯人のところへ。あのとき、病室で様子がおかしかったのに注意を払うべきだったのに、追い詰めないようにと深追いしなかったのが裏目に出てしまった。
「…思い出したんでしょうか」
「多分」
三崎の言葉はあまり聞こえていなかった。ただ頭の中で今までのことを懸命に思い出す。何か、きっかけになるものがあったはずだ。それも先刻やここ二、三日ではない。意識のはっきりしていなかったそれ以前に、稔は何か言っていなかっただろうか。
『…て…たす、け…て…、先生…』。
最初に異変があったとき、そう言っていた。
どうしてもっと早く気付かなかったのだろう。稔が達也のことを「先生」と呼ぶはずがない。あのときは弁護士だということも分かっていなかったのだから、あれは達也に向けた言葉ではなかったのだ。
「先生…って、北沢のことか…？」

その間にも三崎は電話であちこちに指示をとばしている。病院の周辺や行きそうなところを片っ端から捜させるつもりなのだろう。
「岡崎先生。私は一度、捜査本部に戻ります。何かあったらこちらから連絡しますから、携帯繋がるようにしておいて下さい」
言って立ち去る三崎の後ろ姿を見送って、達也は看護婦の方へ向き直った。
「病院にいて下さい。…心配しないで、稔くんは警察が見つけてくれますよ」
「あ、はい」
頷いて、慌てて病院の方へ戻っていく。
稔が北沢に助けを求めていたのだとしたら、あのとき本当に危なかったのは稔ということになる。
『ッ嫌…っ！！』
『…嫌だ放してっ…』
触れられることを極端に嫌がっていた。そういう症状を前にも一度見たことがある。
「…でも、まさか」
まだ養父の事務所にいた頃、先輩弁護士に連れられて会いに行った婦女暴行事件の被害者だ。会ったといっても話は看護婦や女性を通していたし、怯えて顔を見ることさえできなかったけれど。
それなら説明がつく。教室を移動したのは、稔が逃げ出したからだろう。
達也は引き攣った笑いを浮かべた。笑うというよりは、引き攣っているだけのように見えなくもないが。
「何で、そんなこと…」
声に出して呟いてみて、気付いた。その対象が稔であって稔ではなかったとしたら？確か、稔は母親にうりふたつだった。
三崎に連絡をつけようと手を伸ばした携帯が、それより先に鳴り出す。ディスプレイの表示されたのは、ついさっき名刺で見た三崎の携帯番号だ。

「岡崎先生、村瀬稔と思われる少年が中野の駅で目撃されたそうです」
「…中野？」
…学校だ。

第五話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

第六話

ここまで来る途中、走り回っている警官達を何度も見かけた。多分、自分を捜しているのだろう。だけど、まだ見つかるわけにはいかない。

稔は身を隠したまま、咳き込んだ。

「っ痛…」

治りかけていた首筋がまた痛む。起き上がったり歩き回ったり、じっとしていないから傷の治りが遅いのだと、何度か医師に言われていた。

正門の前は警官がうろついていて、きっと見つかってしまうだろう。稔は職員用の駐車場から校内に入れることを思い出した。あの周辺は運動部の部室ばかりだし今はどこのクラスも授業中だから、入ってしまえば見つかることはない。

自分が他人に迷惑をかけていることは分かっていた。叔母夫婦だってきっと今頃心配してくれている。両親のことを口に出すと決まって悲しそうな顔をするから、二人の前では忘れたふりをしていたけど、本当は忘れることなんて出来なかった。母さんのことも、父さんのことも、あの事件のことも。

『…私を裏切ったりしないだろう…？』

そうだ、本当は裏切りたくなんかない。いつもみたいに笑って「あれは夢だった」って、一言で良いからそう言ってくれれば信じられる。

だから、裏切らないで。

稔はきつく目を閉じて涙を堪えると、顔を上げた。

「…嫌だよ…」

もう誰もいなくならないで。これ以上、大切な人を失くしたくな

いんだ。
稔が人の気配に気付いて背後を振り返ったときにはもう遅かった。何かを口元に押し当てられて気が遠くなる。必死に振り払おうとする力が失われるのに、そう時間はかからなかった。

『いつまで待っているつもりなんだ、由香里』
聞いたことのない男の大きな声に、稔は驚いて机の上に広げていたアルバムを床に落としてしまった。お母さんが大切にしている、お父さんの写真。
『あいつはもう帰って来ないんだ』
『そんなこと、分からないわ。明日帰ってくるかもしれないし、一年後に帰ってくるかもしれない』
最初から聞く耳を持たない由香里に、秋吉は子供が近くにいるのにも構わず、掌で机を叩いた。
『いい加減にしろ！　そんな気が遠くなるような話…』
言ってから秋吉はやっと稔が自分の近くまで来ていたことに気付いたようだった。
『…おじさん、誰？』
稔は相手の顔をじっと凝視して尋ねる。
『この子が…』
稔の顔を見つめたまま呟く秋吉に、由香里は笑顔を向けた。
『おまえの小さい頃にそっくりだ』
『私の息子だもの、当たり前でしょう。…稔、話の邪魔になるから向こうの部屋に行ってなさい』
それが生きているお母さんを見た最後だった。
稔がドアの向こうに消えてしばらくは何事もなかったのが、だんだん二人は激しく言い争うようになって、
ドア越しでも大声が聞こえてくる。
そして不意に静かになった。じっとしていられなくなった稔がド

アを開けた瞬間、頭上から赤い液体が降り注いだ。目の前で母親が傾いて、まるで人形のように倒れ伏す。床に赤い血溜まりができても、その状況を理解することができなかった。
コトン、と音がして秋吉の手にあった灰皿が床に転がる。稔はただ呆然と立ち尽くして秋吉を見上げた。
優しい人で、お父さんとお母さんの大切な友達なの。
違う。この人はお母さんの言っていた人じゃない。優しいって言ってた。だからお母さんを殺したりするはずがないんだ。
秋吉は表情を動かさずに稔の前に膝をついた。ゆっくりと手を伸ばしてその首に手をかける。泣いているように顔は俯いたまま、手に力を込めようとしたとき、稔が秋吉を凝視して口を開いた。
『…おじさん、誰？』

ひやりとした空気にうっすらと目を開けると視界は真っ暗で、カーテンの隙間からはあのときと同じ、茜色の光が射していた。途端にあのときの恐怖が蘇る。
どのくらい気を失っていたのかは分からないけれど、かなり時間が経っているらしい。
「…う…」
頭が重い。今までにも何度かこんなことがあったような気がする。薬品の臭いと目覚めたときの不快感は、病院で魘されたときに嫌というくらい経験した。
「…睡眠薬か…」
気だるさを訴える身体を無理矢理起こすと、傷を庇いながら周りを見回した。電気は点いていないけれど、憶えがある。図書室だ。
「どうして」
「司書の先生が休みで良かった。休館なら誰も入って来ないからな」
人目を気にするように入ってきた秋吉は、そう言って内側から扉に鍵を掛けた。

「…先生…」
「大人しく病院で寝ていれば良かったのに」
冷たい声音に、稔は自分自身を守るように後ずさる。こんな声だっただろうか。こんな目をしていただろうか。
「…先生が、北沢先生を殺したの…？」」
図書室は広かったけれど、本棚や机に邪魔されて思うように動くことができない。
「何を言いだすのかと思ったら、そんなことを訊くためにこんなところまで一人で来たのか。…君だって見ていただろう。私があの男を」
「嘘…、俺、何も憶えてないんだ。あの日のこと、全部忘れる。だから」
縋るように、稔の前に屈み込んだ秋吉の腕を掴む。顔を伏せているけれど、肩の震えで泣いているのだと分かって、秋吉は苦しげに眉をしかめた。
「お願いだから、優しい先生に戻って」
「…のせいだ」
掠れた声でうめく。稔は顔を上げて目を瞠った。
「…せんせい…？」
「おまえのせいだよ、由香里」
その意味を理解するより早く、壁に押しつけられた背中に痛みが走る。大きく骨張った手が首筋を圧迫していて、痛いというよりは苦しかった。
「おまえが、いつまで経ってもあいつのことを忘れないからっ…どうして…私の方が慎一よりずっとを、おまえを大切にしていたのに…っ」
目が正気ではない。稔はその手を引き剥がそうとしたが、力の差は歴然としている。あの日、まるで抵抗できなかった、あの力だ。恐怖と苦しさで、喘ぐように言葉を紡ぐ。
「…俺は…母さんじゃ、ない…」

秋吉には聞こえていないようだった。視界が霞んで、頭がぼうっとする。意識が薄れていくのを辛うじて堪えながら、稔は何度も声にならない声を上げた。
「裏切り者…」
「…い…、せん、せ…っ先生…ッ」
だんだん力の入らなくなっていく腕を必死に持ち上げて、無意識のうちに秋吉の手の甲に爪を立てる。
いつも優しかったのは、俺が母さんに似ていたから？
絞めつける指の間から血が流れる。瞠目した秋吉が一瞬だけ手を緩めたとき、閉めたはずの図書室の扉が大きな音を立てて開いた。
「あんまり、イイ趣味じゃないな、先生」
冷ややかな言葉を投げかけた達也の手には、いつもは職員室で保管されているマスターキーがある。
「…慎一…」
混乱したまま血走った眼で達也を睨みつける。期せずして束縛から解放された稔は、一気に肺に流れ込んできた空気に咳き込んだ。
「大丈夫か」
稔の傍に膝をついた達也は、ぱっくりと開いてしまった傷口に手を当てると背中を擦って尋ねる。
「いろいろ無茶なことをしてくれるな、君は」
「…ごめ…なさ、い」
稔は荒い呼吸の下で、途切れ途切れに答えた。
「…また、私を裏切るのか…由香里…」
ふらりと立ち上がった秋吉が、色を失った瞳で二人を振り返る。その目はもはや、達也も稔も見ていなかった。映っているのは慎一という男と由香里という女だけだ。
「裏切ったのはどっちだよ」
怒気を含んだ言葉を、達也は秋吉にぶつけた。
本当に、父親のように慕っていたからこそ、あんなになってまで庇っていた。何もかも思い出しても、誰にも言わずここまで来た。

その稔を、また裏切った。
「あんたが稔にしたこと、思い出してみろよ。これから先も、稔はあんたのせいで苦しむかもしれないんだ」
いくら未遂でもこの先、疵が残らない保証はない。自分を助けようとして目の前で北沢が殺された疵、そして信頼していた秋吉に裏切られた疵。
「…由香里…、私は…」
「あんた、狂ってるよ。…どうかしてる。こいつは由香里なんて女じゃない。それに、あんたの言ってる由香里は、あんたが殺したんだろう」
言われて、秋吉は目を見開いた。
「調べたんだ。あんた、村瀬由香里が死んで半年もしないうちに見合い結婚してる」
「…そうだ。もう、由香里を待つ必要もなくなったんだからな…」
俯いたその表情を見ることはできない。
「何故…私だと思ったんですか」
秋吉は諦めたように長い溜め息をついた。カーテンの隙間から窓の外が見える。パトカーや覆面が何台も校内に入って来て、警官が校舎に入るのが分かった。
「あんたが最初に面会に来たとき、あのときはまだ睡眠薬を使わないと眠れなかったんだ。病院は規定の時間以外に薬を投与したりしない」
元々、日中は警察や弁護士の面会があるかもしれないから、睡眠薬は服用させないことになっている。
「稔には分かってたんだよ、あんたが自分を襲った犯人だって。だから無意識に見ないフリしたんだ」
もっと早く気付くべきだった。あの後、様子がおかしくなってそれどころではなかったからから、眠っていたのだと思い込んで疑っていなかった。突然急変したのも、記憶の断片が一時的に戻ったからだ。

秋吉は、肩を竦めた。
「七年前のように…忘れていると思って安心していたのに」
階段を駆け上がって来る警官達の足音が聞こえる。ただ呆然と二人のやりとりを聞いていた稔は、その音で我に返った。
「…先生…？」
図書室に三人の姿を認めた三崎は、警察手帳を開けて白い紙と共に示す。
「秋吉和夫さんですね、北沢春明殺害容疑で逮捕令状が出ています。署まで御同行願えますか」
秋吉が無言で目を伏せたのを承諾の意と取って、部下に連れて行くよう指示する。刑事の一人が取り出した手錠を目にした稔は顔色を変えて立ち上がった。
「やめて」
駆け寄って腕を掴むと、すがるように秋吉を見上げる。
「お願いだから…先生までいなくならないで」
黙って稔を見下ろしていた秋吉は一瞬だけ愛しそうに表情を緩めて、目を閉じると強く稔を突き放した。
「…おまえの父親も、私が殺した」
秋吉の言葉に、ふらついて達也に支えられた稔は声にならない呟きを洩らす。
「…え…」
「慎一さえいなくなれば、由香里が帰って来ると思った。…私はおまえの思っているような人間じゃない」
感情のない声でそう言うと、踵を返して今度こそ手錠を掛けられる。
「嘘…」
警官達に連れられた秋吉の姿が扉の向こうに消えるのを、焦点の合わない目で追う。急に身体中の力が抜けて自分で自分を支えられなくなった稔は、達也に凭れたまま、魂まで抜けた人形のように床に座り込んだ。

壊れてしまった。
「だって、俺のこと殺さなかったもの。…七年前も今も…先生は俺のこと殺さなかったじゃないか…」
稔は涙を流すことも忘れて、誰にともなく呟く。
「…村瀬くん」
達也は、稔の名前を呼んだ。こういう状態がいちばん危ないのだと、知っている。自分が昔、そうだったから。支えを失った心が、壊れる。
きょとんと達也を見上げた稔の目から、思い出したように涙が零れる。
「……」
稔は達也の腕に顔を埋めて泣いた。どうしてやるのがいちばんいいのか分からず、達也はただ黙って抱きしめて、稔が泣き止むのを待った。

第六話（後書き）

5月17日　レイアウト変更

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2494e/

鏡花水月

2010年10月8日15時06分発行